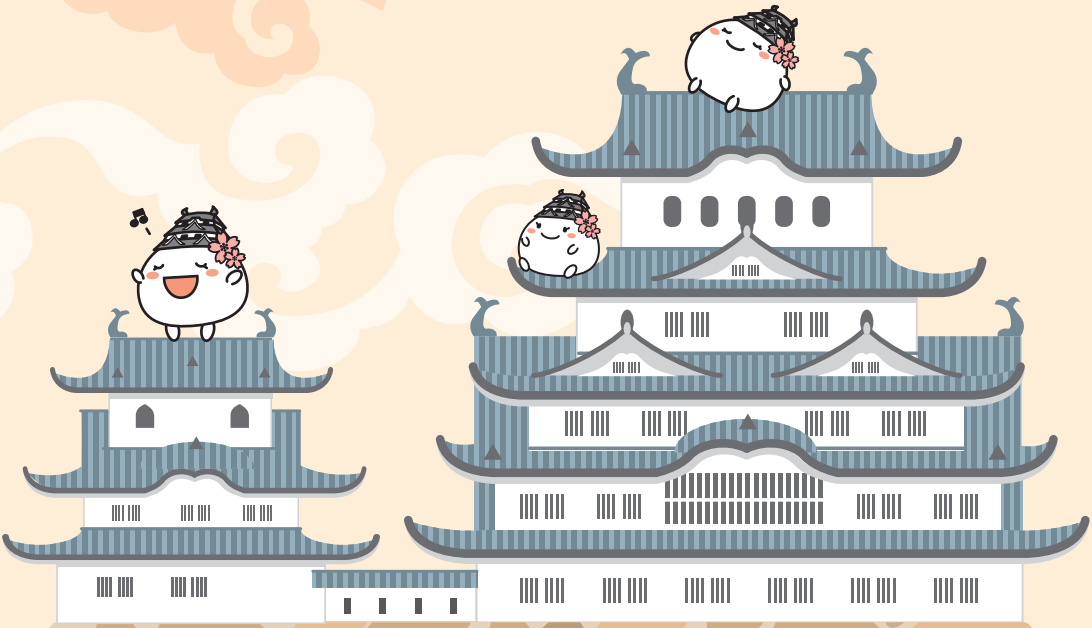
知るほどはまる

姫路城トリビア

Part 1



はじめに

　世界各地から訪れる観光客を虜にする姫路城。昭和26年（1951）に国宝に指定され、平成5年（1993）には奈良の法隆寺とともに、日本で初の世界文化遺産となりました。

　平成21年（2009）から姫路城大天守保存修理工事を行っています。傷みや汚れの激しくなった漆喰壁の塗り直しや、屋根瓦の葺き直しを中心に、5年をかけて行う大規模な工事です。修理の期間中、大天守の大屋根及び最上層（5層部分）を外側から間近に見学できる施設「天空の白鷺」をオープン。城郭建築の醍醐味を体感していただけます。

　このトリビア集は、平成25年（2013）の世界文化遺産登録20周年を記念し、作成いたしました。姫路城内でガイドを行っている団体や姫路城を愛してやまない方々のご協力のもと、城の構造など基本的な内容や、平成の保存修理にちなみ、これまでの修理の歴史を主な内容にしてまとめています。

　また、平成26年（2014）1月から放映される大河ドラマ「軍師官兵衛」にちなみ、姫路城生まれの黒田官兵衛にまつわる内容も盛り込んでいます。

　これを機に、多くの皆様が姫路城に関心を持っていただき、「世界の宝」を保存・伝承するきっかけになればと願っています。

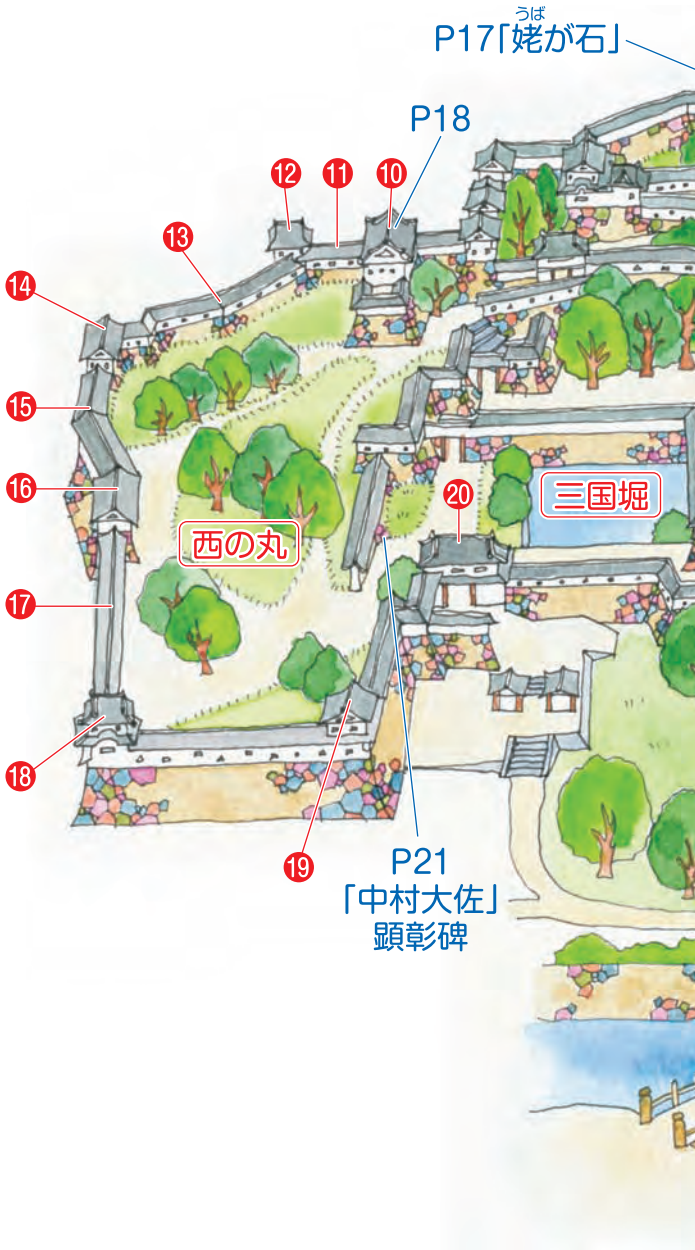
【トリビアンとは・・雑学的な知識をあらわす「トリビア」と、素晴らしいを意味する「トレビアン」をつなげた造語です】

知るほどはまる 姫路城トリビアン

もくじ

はじめに
目次
姫路城マップ

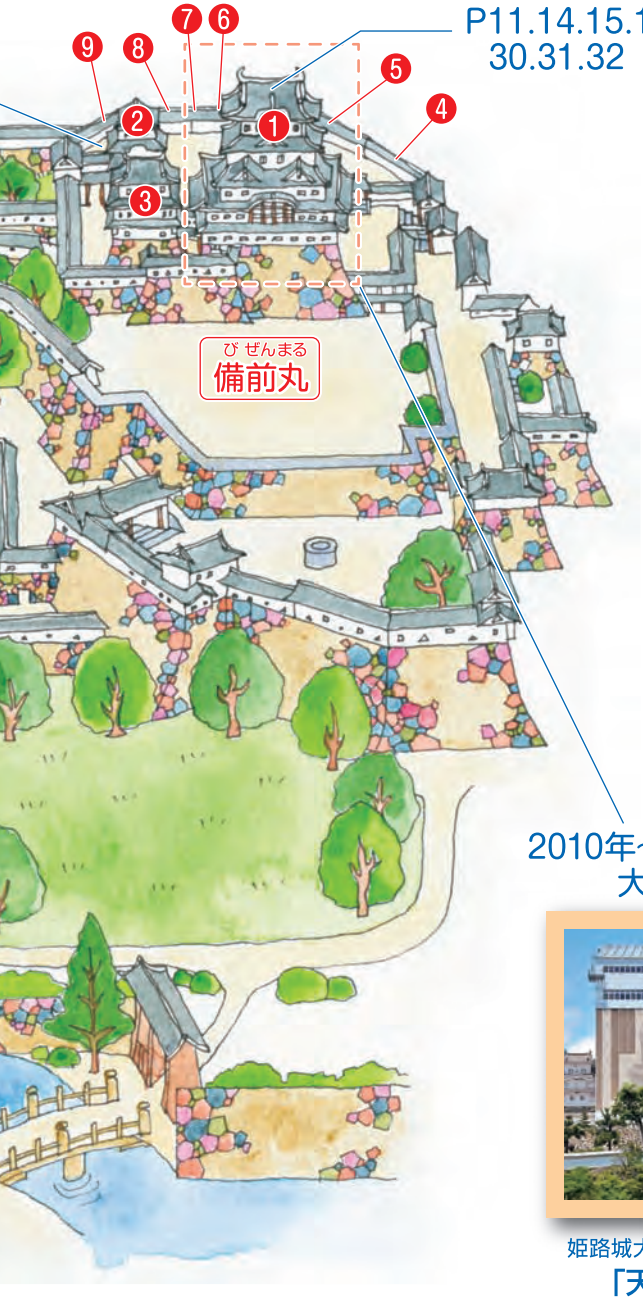
- 姫路城が世界文化遺産に登録されたワケ……1
- 意外と少ない世界文化遺産に登録されているお城……2
- 天守が現存しているのはわずか 12 の城だけ……3
- 姫路城の最初の城主はあの黒田官兵衛の祖父？……4
- 黒田氏の姫路城はどのような城だったのでしょう？……5
- 姫路城で雪の日の朝に生まれた軍師・黒田官兵衛……6
- 秀吉が築いた三層の天守を持つ姫路城……7
- 池田輝政が築いた連立式天守の姫路城……8
- 姫路城が白鷺城とも呼ばれる理由は？……9
- 火には強いが雨漏りには弱い？漆喰の塗籠造り……10
- 大天守の重さと高さはどれぐらいあるの？……11
- 姫路城の城地の広さは甲子園球場の何倍？……12
- 8 年の歳月。さて築城にかかった人数は？……13
- 姫路城大天守、あなたには何階建てに見えますか？……14
- 実はこうなっています！大天守の重層構造……15
- 2 本継ぎになっている西の心柱のヒミツ……16
- 石垣などの石はどこから集めたの？……17
- 西の丸の築城と千姫のための化粧櫓……18
- 中根家絵図で明らかになった藩主の住まい……19
- 江戸時代から何度も行われた修理工事……20
- 明治維新で姫路城も存亡の危機に……21
- 市民の熱意が生んだ「明治の大修理」……22
- 実は戦前から始まっていた「昭和の大修理」……23
- 不発で助かった！天守に落とされていた焼夷弾……24
- 昭和 31 年から始まった大天守の解体修理……25
- 搬送の途中で折れてしまった心柱用のヒノキ……26
- NHK でも紹介された男たちの不屈のドラマ……27
- 平成の修理で見つかった「逆さ揚羽」の軒丸瓦……28
- これまた発見！唐破風の下の不思議な紋……29
- 耐震補強のため？築城中に壁になった窓……30
- 修理中だから間近に見られた窓下のパイプ……31
- 半世紀ぶりに新調された大天守の鯱瓦……32



⑩ 化粧櫓
⑪ カの渡櫓
⑫ ヌの櫓
⑬ ヨの渡櫓
⑭ ルの櫓
⑮ タの渡櫓
⑯ ヲの櫓
⑰ レの渡櫓
⑱ ワの櫓
⑲ カの櫓
⑳ 菱の門

姫路城マップ

姫路城トリビアン



1. 大天守（だいてんしゅ）
2. 乾小天守（いぬいしょうてんしゅ）
3. 西小天守
4. への渡櫓（わたりやぐら）
5. ホの櫓（やぐら）
6. 二の渡櫓
7. ハの渡櫓
8. ロの渡櫓
9. イの渡櫓

2010年～2014年までの
大天守の姿

姫路城大天守修理見学施設
「天空の白鷺」

1. 姫路城が世界文化遺産に登録されたワケ

姫路城は今から20年前にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」において、わが国初の世界文化遺産として法隆寺地域の仏教建造物とともに登録されました。

世界文化遺産の登録基準としては6つの条件がありますが、姫路城は、

- 白鷺城とも言われ、その美的完成度はわが国の木造建築の最高の位置にあり、世界的にも他に類を見ない優れたものである。
- 現存する最大の城郭建築であり、その壮麗な意匠は、17世紀初頭の時代の特質をよくあらわしている。
- 天守群を中心に、櫓、門、塀等の建築物、石垣、濠等の土木工作物が良好に保存されている。

の3点を満たすとして、平成5年（1993）12月10日にコロンビアで開かれた世界遺産委員会で登録が決定。同日午前1時、姫路城迎賓館で待ち受けていた当時の市長らにその一報が届き、関係者の万歳三唱がライトアップされた天守閣にこだましました。

同年12月11日に世界文化遺産に登録され、その登録証のコピーが姫路城管理事務所の資料室に展示してあります。

2. 意外と少ない世界文化遺産に登録されているお城

姫路城と法隆寺地域の仏教建造物を除き、平成24年（2012）12月末現在、世界文化遺産に登録されているのは、「古都京都の文化財」、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」、「厳島神社、原爆ドーム」、「古都奈良の文化財」、「日光の社寺」、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」、「紀伊山地の霊場と参詣道」、「石見銀山遺跡とその文化的景観」、「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の10件です。

このうち登録されているお城は、古都京都の文化財の二条城と、琉球王国のグスク及び関連遺産群の首里城など5城跡だけです。

世界的に見れば、デンマークのクロンボー城やチェコのリトミシュル城などが登録されていますが、多くは石造りやレンガ造り。姫路城が高く評価されたのは、それが木造建築物だったことで、姫路城を調査しにきた世界文化遺産の研究機関・イコモス（国際記念物遺跡会議）の著名な学者も「姫路城は天守閣だけではなく城郭全体が壮烈で素晴らしい。木造でこんな秀でた建造物は世界でも類がないのではないか」と驚いたと伝えられています。

3. 天守が現存しているのはわずか12の城だけ

天守は当初「殿主」「天主」などともいわれ、櫓の上に望楼を乗せた形式から発達しました。平安時代の貴族の館の主殿が逆読みになったという説、キリスト教のデウス（天主）から来た説など、名前の由来については諸説ありますが、わが国最初の天守のある城は織田信長が築いた安土城で、信長は「天主」と命名。その後は「天守」と書くようになりました。

姫路市の姉妹都市（長野県松本市）にある松本城

天守の目的についても、領主の権威や権力を示すため、戦の時の見張りや司令用の塔、大きな倉庫、最後の抵抗拠点等、いろいろな説がありますが、天守に人が住んだのは信長の安土城のみで、城主は城内に設けた御殿と呼ばれる建物に住んでいました。

廃藩置県による明治の廃城令や太平洋戦争時の空襲などがあって、天守が現存している城は今ではわずか12だけ。うち姫路、彦根、犬山、松本の4城は国宝、弘前、丸岡、備中松山、松江、丸亀、伊予松山、宇和島、高知の8城は重要文化財に指定されています。

4. 姫路城の最初の城主はあの黒田官兵衛の祖父？

姫路城の最初の城主については、これまでは貞和2年（1346）に姫山に城を築いた赤松貞範（赤松円心の次男）だとされてきました。

城はその後、一族の小寺氏に引き継がれ、嘉吉の乱で赤松氏が滅亡すると山名持豊が、赤松氏が再興されると赤松政則が城主となり、政則が置塩城に移った後は小寺政隆が、さらに政隆が御着に城を築いて移ると、嫡子の則職が城主となり、天文14年（1545）に家臣の黒田重隆に預けられたといわれてきました。

黒田家廟所（姫路市御国野町御着）

しかし、その後発見された正明寺文書によって、永禄４年（1561）に姫山に城もしくは屋形があったことが確認でき、別の資料にも「永禄の新城」という言葉が出てくることから、姫路城と呼べる確実な城が築かれたのは天文24年（1555）から永禄4年（1561）までの間で、その頃姫路を治めていた黒田重隆・職隆父子が主君の小寺政職の許しを得て城を築いたのが最初ではないかと考えられています。

御着城址

重隆・職隆は2014年の大河ドラマ「軍師官兵衛」の主人公黒田官兵衛の祖父と父。つまり姫路城は黒田家とともにその歴史を歩み始めたことになります。

5. 黒田氏の姫路城はどのような城だったのでしょう?

司馬遼太郎記念室がある姫路文学館

黒田重隆・職隆が築いたと考えられる姫路城がどのような城だったか、については確かな資料はありませんが、『姫路城史』の著者・橋本政次氏は黒田家臣伝などをもとに「黒田氏時代の姫路城は、本丸、二の丸から成り、櫓を掻きあげ、石垣を疊み、塀を築き、堀を廻らし、大手門を始め幾多の門を構へた。城の昇降口には雁木を取りつけた」と記しています。

また、黒田官兵衛を主人公に『播磨灘物語』を書いた司馬遼太郎は、その時代の姫路城を「姫山という小さな丘に、官兵衛の城館がある。山の地形変化を利用してわずかに人工を加えただけの田舎城で、建造物も小さかったが、しかし二の丸の堀は深く、いかにも攻めるのに困難という実用的な城郭だった」と想像しています。

『竜馬がゆく』や『坂の上の雲』など多彩な作品を書いた司馬遼太郎は、実は播磨ゆかりの人で、先祖は羽柴秀吉や官兵衛と戦って敗れた英賀城（姫路市飾磨区）の武将の1人。祖父の代まで対岸の広村（姫路市広畑区）に住み、「播磨は、私にとってほのかながら家の伝承の地である」という一文を残しています。

6. 姫路城で雪の日の朝に生まれた軍師・黒田官兵衛

黒田家や官兵衛に関する文献は、福岡藩士だった貝原益軒が編纂した『黒田家譜』が最も正確だとされており、官兵衛の生誕については「母は明石氏、天文十五年十一月二十九日辰の時、孝高を播州姫路に生り。此時雪降りて其家をおほふ。是英雄の生る、奇瑞なるべし。又家門の繁盛すべき前兆なるか幼よりして大志あり」と記しています。孝高とは官兵衛のこと。天文十五年は西暦の1546年。辰の刻は午前8時ごろ。旧暦の11月29日はユリウス暦の12月22日にあたるので、本当に雪が降っていたのかもしれません。

官兵衛は秀吉の天下取りを支えたことで知られ、秀吉をして「自分の死後、天下を取るものは黒田じゃ」と言わせ、家康をして「西国一の弓取り」と言わしめた稀代の軍師ですが、若い頃には歌の道に入ろうと考えたほどの心豊かな人物です。

司馬遼太郎は、黒田官兵衛は町角で別れたあとも余韻の残る存在であり、「友人に持つなら、こういう男を持ちたい」と語っていますが、その知的でさわやかな人柄は姫路城での日々に育まれたのかもしれません。

7. 秀吉が築いた三層の天守を持つ姫路城

天正5年（1577）、織田信長の命を受けて中国の毛利氏を倒すべく播磨に入った羽柴秀吉は、黒田官兵衛の力を借りて多くの武将を味方につけますが、やがて毛利方につく者が増え、秀吉は敵方となった三木城や英賀城を攻め滅ぼします。

こうして播磨を平定した秀吉は三木城を本拠にするつもりでしたが、「姫路の方が播磨の中央に位置し交通の便もよい。ここを毛利攻略の足場に」との官兵衛の強い勧めで姫路城に入り、官兵衛は城を出て妻鹿の国府山城に移ります。

しかし、当時の姫路城は御着城の出城に過ぎなかったので、秀吉は官兵衛の意見も取り入れながら新たな城の建設にかかりました。

そして天正9年（1581）に3層の天守を持つ姫路城が完成。最上成。最上階には唐破風の大屋根に火灯窓を設け、壁の羽目板の一部には金箔が張られていたのでは、と推測されています。

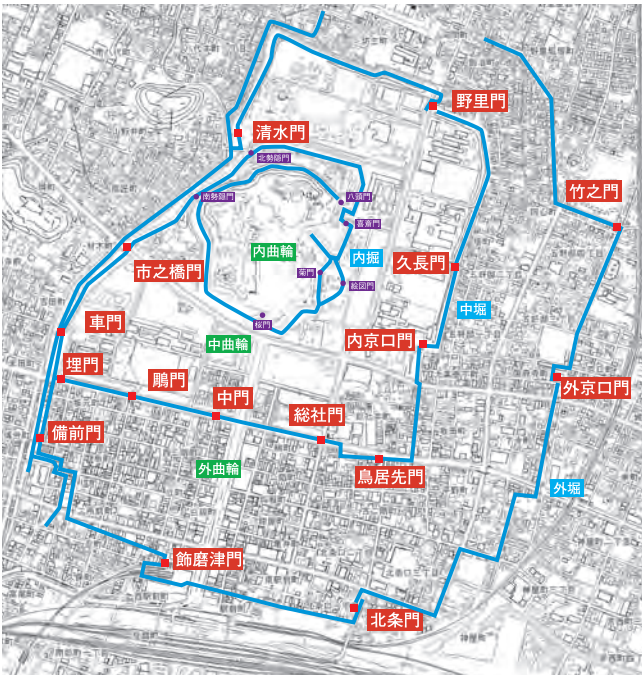
秀吉の姫路城は謎が多かったのですが、昭和30年代の姫路城の解体修理の際に天守台の地下から秀吉が築いた城の天守台の石組みと礎石が発見され、現在とほぼ同じ位置に建っていたことが分かりました。

8. 池田輝政が築いた連立式天守の姫路城

関ヶ原の合戦の戦功により、慶長5年（1600）に三河吉田（豊橋市）15万石から播磨一国52万石の太守として姫路に入った池田輝政は、翌年から新しい姫路城の建設に着手。姫山にあった秀吉の天守を取り壊す一方、石垣などは生かしながら、慶長14年（1608）に外観5重、内部は7階の大天守と乾、東、西の3つの小天守を渡櫓で結ぶ連立式天守の姫路城を完成させました。

その一方で輝政は内曲輪、中曲輪、外曲輪を三重の堀によって左巻きのらせん状に配置する「らせんの縄張」で城と城下町の建設を行い、外堀によって城内と城外をはっきり区切る総構式の城下町を完成させました。

この大事業の間にも江戸では徳川幕府によって江戸城築城と城下町改造が急ピッチで進み、輝政も他の大大名とともにこれに参加。輝政は築城の名手とうたわれていたため、その後も篠山城、名古屋城築城などに駆り出され、随分と苦労したようです。



9. 姫路城が白鷺城とも呼ばれる理由は？

池田輝政が築いた姫路城は別名「白鷺城」（はくろじょう、しらさぎじょう）とも呼ばれます。それは、姫路城が白漆喰総塗籠という方法で、外壁を白漆喰で塗り籠めるだけでなく、屋根瓦の目地にも白漆喰を施した結果、天守群がまるで翼を広げたシラサギのように見え、いつしか姫路城下の人々は親しみを込めてそう呼ぶようになったといいます。

他にも名前の由来については、お城の周りにシラサギがたくさん住んでいたからとか、お隣の「烏城」（うじょう、からすじょう）と呼ばれている黒い板張りの岡山城との対比から、などの説があります。外観の印象から来るものなのでしょうか、高知城(高知県)＝鷹城、若松城(福島県)＝鶴ヶ城など、別名のつく城は少なくありません。

また、輝政がなぜそれまでの多くの城のように「黒」ではなく、「白」の城を築いたのかについても諸説ありますが、一般には戦国時代の終わりを予感し、「武による統治」から「美による威嚇」の時代になると考えた輝政が、城主としての威厳を「美」に託し、「まぶしいばかりの白」にこだわったのではないかと考えられています。

10. 火には強いが雨漏りには弱い？漆喰の塗籠造り

「天空の白鷺」（姫路城大天守修理見学施設）で漆喰の修理の様子を見ることができますが、姫路城の天守の外壁は木の枝や竹を組んで作った小舞という格子状の骨組みに壁土を何層も重ね塗りし、その表面に漆喰を塗って仕上げています。

漆喰は防火・耐火に優れた建築資材で、古くから衣類などを収める寝殿造りの倉庫の壁などに用いられてきました。

漆喰の塗籠造りとは、燃えやすい木材等を漆喰で塗り固める建物の造り方を指し、蔵などによく使われています。姫路城が建物の外部を漆喰の塗籠造りにしているのも防火・耐火のためで、主に鉄砲への備えです。江戸時代には内壁・外壁とも厚さは約3mmでしたが、昭和の大修理で外壁は約30mmへと厚く塗り替えられています。

ただ、漆喰そのものは水に強いのですが、屋根から雨水が漏れたり、強い外からの雨が建物の内側に入ってしまうと、漆喰の壁がその退路をふさいでしまい、水が垂木や腕木に染み込んで木材部分を徐々に腐らせてしまいます。歴代城主は雨水対策に知恵をしぼったようです。

11. 大天守の重さと高さはどれぐらいあるの？

大天守の総重量は約5700トンと推定されています。その内訳は壁土が約2000トン、瓦葺き土と目地漆喰が約3200トン、木材が約450トン、金属が約50トンとなっています。

高さは城が建つ姫山の標高が45.6m、石垣の高さが14.85m、建物の高さは31.5mで、合計すると大天守の天辺の高さは海抜91.95mになります。石垣と建物を含めた大天守の高さは約46mで、ちなみに江戸時代の江戸城の高さは58.6m、大坂城は58.3m、名古屋城は48.6mもあったそうです。

ただ、このうちの総重量については、資料によっては約6200トンとするものもあります。これはかつての重量で、昭和の大修理の際に構造物の負担を軽減するために瓦の軽量化を行い、壁も厚塗りしていたのを本来の厚さに戻したため、以前より約500トン少なくなったのです。つまりはダイエットの効果で、平成の修理後には、あるいは総重量が変わってくるかもしれません。

12. 姫路城の城地の広さは甲子園球場の何倍？

姫路城俯瞰写真

池田輝政が築いた姫路城は、全体がらせん式の縄張りになっていて、内曲輪、中曲輪、外曲輪に分けられています。

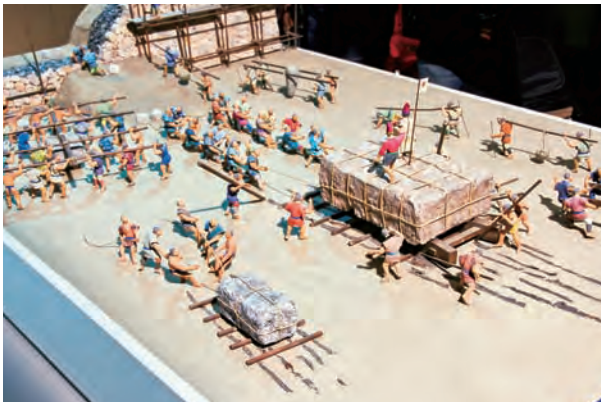
このうちの内堀から中にあるお城の中心部が内曲輪で、その面積は約23ヘクタール（230000平方メートル）にのぼります。これを甲子園球場のグラウンド部分（14700平方メートル）と比べると約15.9倍に。スタンド部分も含めた球場全体（39600平方メートル）と比較すると約5.9倍の広さになります。

さらに、これに内堀と中堀の間にあって武士の屋敷が建ち並んでいた中曲輪、中堀と外堀の間にあって主に商人や職人が住んでいた外曲輪を合わせると、その面積は約233ヘクタール。同じように計算すると甲子園球場の約60倍の広さを持つことが分かります。

13. 8年の歳月。さて築城にかかった人数は？

池田輝政は慶長6年（1601）から8年の歳月をかけて姫路城を完成させましたが、築城にどれほどの人数を要したかという史料は残されておらず、具体的な数字は分かっていません。

しかし、当時は石高100石につき人夫1人を割り当てるのが一般的だったとの記録があるので、これをもとに計算してみると、姫路城築城についても輝政の石高は播磨国52万石。実際はその2割増しの年貢を徴収したので62万石。その上、慶長8年（1603）には二男の忠継に備前28万6千石が与えられたので、62万石だった最初の2年間で6200人×365日×2年＝452万6000人。領地が播磨・備前の2国となり、合わせて90万石となった6年間で6200人+2860人=9060人で、これに×365日×6年となるので=1984万1400。合計でざっと2400万人という数になります。



石積みのジオラマ（兵庫県立歴史博物館蔵　城展示室）

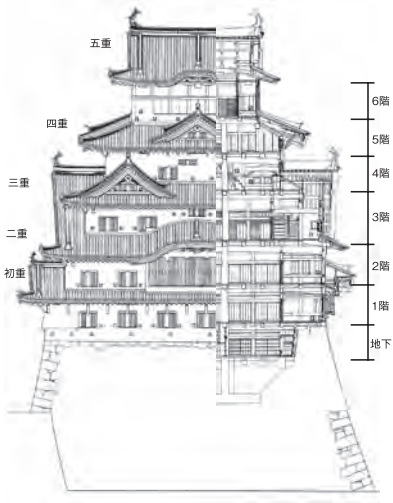
石曳図屏風（兵庫県立歴史博物館蔵）

それにしても膨大な数で、築城という厳しい労働に駆り出された領民たちもさぞかし大変だったことでしょう。

14. 姫路城大天守、あなたには何階建てに見えますか?

城郭建築では外観の屋根の数が「重（層）」、内部の床の数が「階」。大天守も外観は5重ですが、内部は地下1階と地上6階の7階建てになっており、5重7階建てが正解。各階は以下のようになっています。

地階／天守台の上部石垣にすっぽり収まるように造られた穴蔵。入口は二重構えの厳重な扉で、籠城に備えて台所の流し台や厠も設けてあります。



1 階 / 南側は大広間、北側は 3 つの部屋に区切られ、周囲を入側（部屋と外縁側との間にある通路・縁側）とし、壁には武具かけを備えています。

2 階 / 間取りは 1 階とほぼ同じです。

3 階 / 間取りは 2 階以下と全く異なり、大広間が 1 室。他の階に比べ天井が高いので踊り場のある階段が設けられています。南北の入側に石打棚が取り付けられています。

4 階 / ここも大広間が 1 室ですが入側はありません。窓が床面よりかなり高いため四方に石打棚が設けられています。

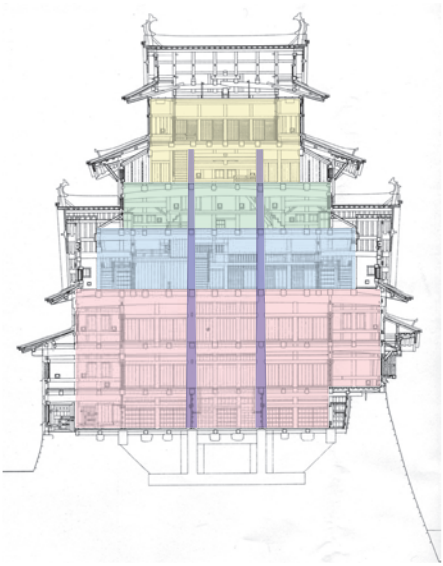
5 階 / 狭く暗い屋根裏部屋で、南北の千鳥破風の窓が明かりとりになっています。

6 階 / 天守最上階。入側から一段高くなった広間は書院風に仕上げられています。

15. 実はこうなっています！大天守の重層構造

大天守は、「地階から2階まで」と「3階」「4階」「5階から6階まで」の4つのブロックで構成されています。

その建設方法は、まず地階から1、2階にかけて通し柱を立て、巨大な直方体をした「3階建ての箱」を組み立てます。これが下部ブロックで、次に3階にこれより小さい箱を積み上げ、4階にはさらに小さな箱を作って乗せ、最後に5、6階に下部ブロックと同じような通し柱を立てた「2階建ての箱」を組み上げ、4階の上に乗せています。



それぞれのブロックは井桁（井の字型の桁）の上に櫓を組んだ頑丈な造りになっていますが、各ブロックの縦の柱の位置はまちまちで、このままだと横揺れの心配が出てきます。その弱点を補うのが「心柱」で、高さ24.8m、根元の直径0.95mもある東西2本の心柱が、地階から6階の床部分まで大天守の中央部を貫き、各ブロックが心柱に向かって固く絞り込まれるように組み上げられています。つまり2本の心柱を全体の芯にしたわけで、これにより強度が増し、横揺れを防げるようになっています。

16. 2本継ぎになっている西の心柱のヒミツ

姫路城大天守の東西の心柱は、築城当時は東が樅の1本材、西は3階床上部分で2本継ぎされ、上部が栂材、下部が樅材でした。

大天守は積み上げたブロックの真ん中に2本の心柱を貫き、横揺れに対する強度を保つために心柱の東西にも梁を通し、各ブロックと心柱との固定化を図っていますが、このやり方だと上部に行くほど心柱に梁材をはめ込めなくなってしまいます。

たとえばハシゴを組み立てる場合を考えてみて下さい。この場合ハシゴの縦2本の親木が心柱にあたり、階段となる横木が梁材になりますが、横木を真ん中あたりまで先に組み上げ、しっかり固定してしまうと、それから上の部分では横木をはめ込めなくなってしまいます。ハシゴなら下から上まで同時に横木をはめ込み、一気に締め上げることもできますが、大天守ではそうはいきません。

そこで、とりあえず東は1本通しの心柱にし、西は3階床上部分で半分に切り落として立ち上げ、下部を締め上げてから上の半分を継ぎ足し（つまり2本継ぎにして）、上部ブロックを締め上げたというわけです。

17. 石垣などの石はどこから集めたの？

「姥が石」という伝説が姫路城に残っています。これは羽柴秀吉が3層の天守を持つ姫路城を築いたときの話ですが、石垣の石がなかなか集まらず困っていた秀吉に、城下で焼き餅を売る老婆が店にあった古い石臼を「せめてこれでもお役にたてれば」と献上。この話がたちまち城下の評判になり、人々が競って石を寄進したという話です。

つまり、それほど石集めは大変だという話で、輝政が築いた姫路城には内曲輪の石垣だけで10万3千㌧以上の石が使われたといわれています。これを船で運ぶとすれば3千㌧積の船で35隻を要する計算になり、想像すらできません。

では、これらの石材はどこから集めたのでしょうか？　姫路城の石垣の石質を調べると凝灰岩、花崗岩、堆積岩などがありますが、主には凝灰岩で、増位山、広峰山、鬢櫛山、景福寺山、八丈岩山等、比較的城に近い山塊から切り出され、城内に運ばれたと考えられています。

もちろん、これだけでは石は足りず、ところどころに古墳の石棺や石塔、石灯籠、宝篋印塔、石臼、墓石なども使われています。これらを「転用石」と呼んでいます。

転用石（中央の四角い石が五輪塔）

姥が石

18. 西の丸の築城と千姫のための化粧櫓

元和3年（1617）池田氏に変わって15万石の姫路城主となり、さらに嫡男忠刻に嫁いだ千姫の化粧料として幕府から10万石が与えられた本多忠政は、三の丸に政務のための居館を新築するとともに、鷺山と呼ばれていた西の丸の高台整備に着手します。

池田輝政の時代の鷺山は防御性が低かったので、忠政は翌年石垣のかさ上げを行い、東北隅に一部二層になった櫓を建設。そこから南西へ「カ」「ヨ」「タ」「レ」の渡櫓と、その間の角部分に「ヌ」「ル」「ヲ」「ワ」「カ」の隅櫓を配し、地形に合わせて半円形の城壁を形成。城の西側からの攻撃に備える強固な防護壁を築きました。

その千姫が使ったとされる櫓がいわゆる「化粧櫓」。二階が西の丸から男山天満宮を遥拝する千姫の休息所になっており、桃山風書院造りの畳敷きで、各部屋の間仕切りは襖、壁は白漆喰と、居住性を重視した櫓になっています。

また「長局」とも呼ばれる「カ」や「ヨ」の渡櫓には女中たちの部屋が設けられ、女性の館らしく板壁や柱には松や草花の彩色画が描かれていましたが、一方で外側の廊下には石落としや鉄砲狭間を設けて城としての備えを怠りませんでした。

19. 中根家絵図で明らかになった藩主の住まい

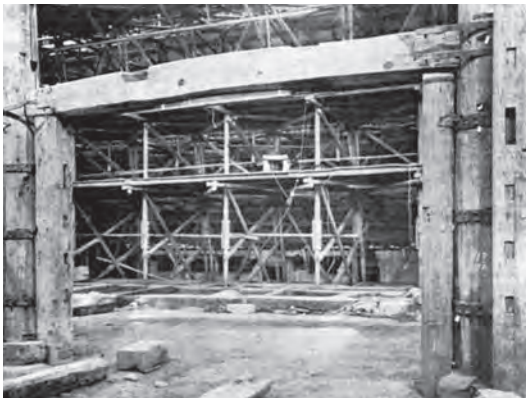
西の丸造営とともに本多忠政は、三の丸西側の小高い所に居館を建て、ここを「本城」とします。本城は藩主の御殿とその曲輪を含み、約1500平方メートルの広さを持っていました。

このうち御殿は「表」と「奥」に分けられ、表は家臣との対面の場や藩政の庁舎の役割を担う藩主の公邸で、奥は奥御殿、長局などからなる私邸になっていました。

姫路城の本城や御殿の様子が明らかになったのは平成10年に初めて公開された「播州姫路城図」（大分市・中根忠之氏所蔵）によってで、中根家は本多家の重臣。天和2年（1682）から宝永元年（1704）までの第2次本多時代に描かれたものと考えられています。

城図には城郭建築物のほか内曲輪全域の建物が配置通りに、間取りから床の間や棚、戸が障子であるか唐紙であるかまで詳細に記されており、御殿の玄関を入ると鶴之間などの大広間が連なり、続いて藤棚のある庭を持つ小書院などがあって、その北に料理の間をはさんで、奥にあたる御居間、御休憩の間があり、風呂や能舞台もあったことが分かっています。

20. 江戸時代から何度も行われた修理工事



現在、「平成の修理」が行われていますが、姫路城では築城以来、何度も修理工事が行われています。

驚くのは築城からまだ47年しかたっていない明暦2年（1656）に行われていることで、大天守地階部分の東西の心柱の根元部分が腐り始めたので、その部分をくりぬいて栂材をはめこんで帯鉄巻き（鉄を帯状に薄く長く延ばして巻く）にし、添え柱を立てる補強が行われています。

このほか昭和31年（1956）から行われた「昭和の大修理」で発見された墨書（建物や材木などに墨で書かれたメモのようなもの。大工たちの仕事の記録などが書かれている）によって、江戸時代に大天守だけでも軸部の補強修理が19回、屋根修理・軒廻り修理が17回も行われていることが分かっています。

歴代藩主も大天守の状態が気がかりだったようで、初めて城に入るときに「水改」を行っています。水改には床に穴をあけて錘を垂らして垂直方向の傾きを調べる「立水改」と、床に水準器を置いて水平度を調べる「陸水改」があり、貞享3年（1686）から宝暦2年（1752）の間に通算7回も実施しています。

21. 明治維新で姫路城も存亡の危機に

明治維新により武士の時代が終わると、戦への備えや藩の役所として存在していた城はもはや無用となりました。そこで明治政府は明治6年（1873）に全国各地の城を「存城」（残す城）と「廃城」（廃棄する城）に分け、存城は陸軍省が管轄することになりました。

存城と決まった姫路城にも翌年、陸軍の歩兵第十連隊が入り、三の丸にあった建物が次々と取り壊されました。陸軍が姫路城に入ったのは城の保護や保存のためではなく、城内の敷地を兵舎や訓練場にするためだったからで、天守閣を初め多くの建物は修理されることもなく、荒れ果てていきました。

そんな中で軍事学的見地や芸術文化面から姫路城の価値に着目したのが、当時陸軍省第四局長代理だった中村重遠大佐です。大佐は時の陸軍卿（陸軍大臣）山縣有朋に「永久保存するために陸軍の費用で一日も早く修理すべき」との意見書を出し、政府に働きかけました。その結果、明治12年（1879）に姫路城の保存が決まり、毎年の補修費が認められることになりました。城内の菱の門近くに中村大佐を称える顕彰碑が建っています。

22. 市民の熱意が生んだ「明治の大修理」

修理中の姫路城（兵庫県立歴史博物館蔵（高橋秀吉コレクション））

補修費が出るようになったものの、わずかな額でしかなかったので、明治40年代に入ると姫路城の屋根には雑草が生い茂り、瓦は落ち、軒は傾き、壁は崩れるといった状態になり、「日本の名城たる播州白鷺城天守は甚しく腐朽し、修復せずには到底保存し難き」と、新聞に写真入りで大きく報じられるほどでした。

これに危機感を持った姫路市民は明治41年（1908）に「白鷺城保存期成同盟会」を結成。「姫路城を救え!」という市民ぐるみの運動となり、姫路市出身の陸軍次官石本新六中将らの協力を得て政府に救済を請願。ついには国会を動かし、明治43年から陸軍省による本格的な保存修理工事が始まりました。

工事は天守東側の「と」の四門の外側から大天守に桟橋を渡し、トロッコで木材を運び、モーターを据え付けて資材をワイヤーロープで引き上げて行われました。そして南東方向に大きく傾いていた大天守を倒壊から守るため、南東側の1階と2階に新しい柱を入れ、各階の壁面に筋違を組み入れるなどの補強工事を行い、天守の外壁も白く塗り替えて翌年7月に竣工。これを「明治の大修理」と呼んでいます。

23. 実は戦前から始まっていた「昭和の大修理」

昭和の大修理といえば昭和31年（1956）から始まった大天守の解体修理工事を思い浮かべますが、実は戦前の昭和9年（1934）から始まっていました。

先ほども触れたように姫路城は昭和6年に「国宝保存法」に基づいて大天守を初め82棟の建物が国宝に指定され、これ以降、城の修理・保存は国（文部省）の手で行われるようになりました。

崩れ落ちた西の丸「タ」の櫓南端

そして昭和9年、豪雨のために西の丸の「タ」の渡櫓から「ヲ」の櫓にかけての石垣が櫓もろとも崩れるという事故が起こり、国が調査をしたところ、姫路城全体の老朽化が進み、抜本的な修理が必要になっていることが分かりました。

崩れ落ちた西の丸「ル」の櫓～「タ」の渡櫓、「ヲ」の櫓下層南面

そこで翌年から西の丸の解体修理工事が国の直轄事業として実施され、昭和13年にほぼ完了。次いで工事は北腰曲輪の「イ」「ロ」「ハ」「ニ」「ホ」「ヘ」の渡櫓や門、土塀などの修理に移っていきましたが、太平洋戦争の戦局が悪化。予算も工事に従事する人手も不足し、昭和19年に一時中断されることになりました。

24. 不発で助かった！天守に落とされていた焼夷弾

焼け野原になった姫路市街
（兵庫県立歴史博物館蔵　高橋秀吉コレクション）

姫路城が昭和20年の米軍の空襲から逃れられたのは、アメリカが文化財としての城の価値を認め、攻撃しなかったからだとの説もありましたが、これは伝説に過ぎず、米軍は姫路城にも焼夷弾攻撃を行い、三の丸にあった鷺城中学校が焼失。西の丸にも2発の焼夷弾を落としています。それよりも驚くのは、実は大天守にも焼夷弾が落とされていたという事実です。

これは平成17年（2005）の『ぎふ児童文学』戦争児童文学特集で、当時姫路の部隊にいて不発弾処理にあたっていた鈴木頼恭さんが明かしているもので、姫路に空襲があった7月3日の翌朝、鈴木さんたちは軍の命令で姫路駅構内の不発弾を処理。続いて姫路城に向かって、天守最上階の南側床板に不発だった100ポンド焼夷弾が転がっているのを発見。命懸けで何とか城外の広場まで担ぎ出し、無事に処理することができたそうです。

鈴木さんが天守の窓から見上げると軒端の瓦が4枚なく、どうやら焼夷弾は瓦を飛ばして窓から飛び込んできたようですが、もし不発弾でなかったら、もし担ぎ出す途中に爆発していれば、今日の姫路城はなかったわけで、いくつもの偶然と幸運が姫路城を戦禍から守ってくれたようです。

25. 昭和31年から始まった大天守の解体修理

戦争中の空襲によって名古屋城など多くの名城の天守が焼け落ちましたが、幸い姫路城は無事で、戦争で中断していた修理・保存工事が昭和25年から再開され、菱の門や帯の櫓、帯郭櫓などの解体修理が行われました。

そして昭和31年からは文部技官の加藤得二が工事主任に、播州一の宮大工とうたわれた和田通夫が棟梁に任命され、大天守や小天守など本丸中心部の解体修理工事が始まりました。工事は素屋根にすっぽりと覆われた中で行われ、総工費は約5億5千万円、工事に従事した人は延べ25万人を数えました。

この解体修理の最大の難題は大天守の傾斜でした。大天守は築城まもなくから東南方向に傾き、「東に傾く姫路のお城　花のお江戸を恋しがる」の俗謡が生まれたほどでしたが、調査の結果、大天守の石垣は姫山の硬い岩盤上に築かれているものの、石垣に囲まれた部分は柔らかい盛り土の上に乗っているだけと判明。石垣は沈まないが、盛り土部分が天守閣の重さに耐えられず、歪みながら沈んでいくことが分かり、これを解決するために地盤を岩盤まで掘り下げ、頑丈なコンクリートの基盤が据え付けられました。

大天守素屋根と登りさん橋

26. 搬送の途中で折れてしまった心柱用のヒノキ

笠形神社より購入の西大柱（姫路市役所前）

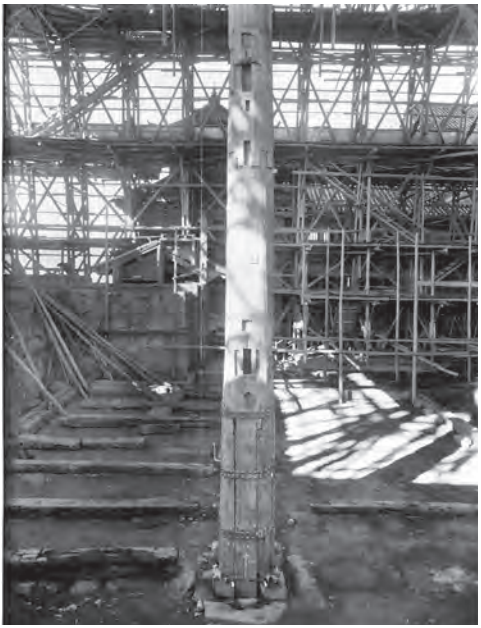
昭和の大修理のもう1つの難題は心柱でした。東の心柱は25mの一本材で、これは再利用できることが分かりましたが、問題は西の心柱。栂と樅の木を3階で接合させてあったのですが、2本とも腐食していて使えなかったのです。

そこで、東の心柱と同様、西も一本材にしようということになり、各地で長さ25m以上のヒノキ材探しが始まりました。昭和33年春のことで、業者から徳島県に候補の木がある、神崎郡の笠形神社にある等連絡が来ましたが、いずれも何かしらの欠点があって、なかなか決まりませんでした。そして関係者が焦り始めた翌年3月になって岐阜県の木曽山中の国有林で樹高約35m、根回り5.8m、末口（木の上の梢の方の直径）44cmの理想的なヒノキが発見されたのですが、搬送の途中に谷に落ち、中ほどから折れてしまうという悲劇に見舞われてしまいました。

しかし、幸いにも折れ残ったヒノキに、笠形神社のヒノキを2本継ぎにすれば何とか心柱になることが分かり、それぞれの木は同年8月と9月に姫路に運ばれ、市民の手によって大手前通りで祝曳きが行われました。

心柱を運んでいる様子

27. NHKでも紹介された男たちの不屈のドラマ



天守内の心柱

昭和の大修理のさなか、ようやく見つかったヒノキが搬送の途中で2つに折れ、工事主任の加藤得二や棟梁の和田通夫は泣く泣く2本継ぎにする決断をするのですが、実は前にもお話ししたように、姫路城の大天守はどちらか片方の心柱を2本継ぎにしなければ建てられない構造になっていたのです。仮に折れずに運んできていても、3階の床の長さで切って2本で継がなければ大天守に収まらなかった。この偶然の不思議に和田らは「神の助け」を感じるとともに、輝政の築城時にその難題をクリアしていた400年前の「匠」たちの知恵と技量に改めて感嘆したといいます。

この心柱探しの苦労など、天下の名城をよみがえらせるための男たちの不屈の戦いは、平成13年（2001）9月11日放映の「プロジェクトX～挑戦者たち～」で「白鷺舞え!空前の解体工事」のタイトルで紹介されました。

「プロジェクトX」は当時の人気番組で、中島みゆきの主題歌「地上の星」でも知られ、番組終了直後に9・11同時多発テロのニュースが飛び込み、炎を上げる世界貿易センタービルが映し出されたのも記憶に新しいところです。

28. 平成の修理で見つかった「逆さ揚羽」の軒丸瓦

天地逆になっている池田氏家紋「揚羽蝶文」

平成21年（2009）から始まった姫路城大天守保存修理工事。外壁及び屋根の補修と耐震性能評価に基づく構造補強が主な内容ですが、これまでに幾つかの新しい発見も生まれています。

その1つが東に面した天守最上層の切妻屋根の南側と、西に面した2重から3重目にかかる大千鳥破風の北側で見つかった、池田氏の家紋の揚羽蝶文が逆さになった掛丸瓦です。昭和の大修理の際に取り付けられたもので、その理由は謎に包まれたままです。

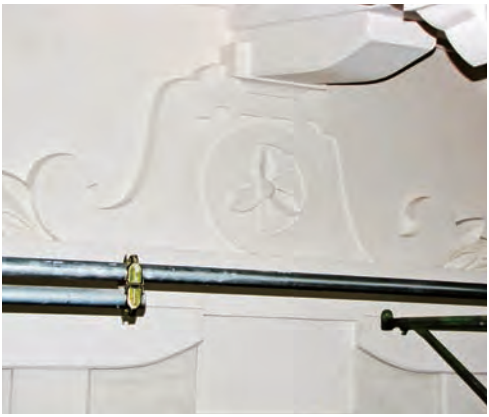
こうしたことは大工仕事に比較的見られ、日光東照宮の陽明門でも12本ある柱のうち1本だけが彫刻の模様が逆向きになって建て込まれています。これは「魔除けの逆柱」と呼ばれるもので、「完成と同時に崩壊が始まる」との故事を逆手にとり、わざと柱を未完成の状態にすることによって災いを避けようというものです。果たして昭和の大修理に立ち会った瓦職人がそれを知ったうえで、姫路城大天守の末永い安泰を願ってわざと「逆さ揚羽」にし、未完成のままの状態にしたのでしょうか?

29. これまた発見！唐破風の下の不思議な紋

平成の修理によって、これまでは望遠鏡でも使わないと見ることができなかった大天守の細部が間近に見られ、新たな謎も見つかっています。

その1つが大天守最上階の家紋で、家紋は北側の軒唐破風の下にある蟇股（軒下の装飾的な部材）という場所にあります。「昭和の大修理」の前の写真記録にも残っていましたが、今もって何の紋なのか分かっていません。

最上層南側の同じ場所には酒井家の「剣酢漿草」の常紋がかたどられているのですが、北側は花のような形をした紋で、姫路市立城郭研究室の工藤茂博学芸員は、江戸時代の同家の記録『姫陽秘鑑』にも「剣酢漿草」とともに記されている酒井家の別紋「沢瀉」ではないかと推測。そのほか、雪をかたどった「巌敷き雪」ではないかとする説もあります。



謎の家紋

さらに2重目の軒唐破風の蟇股には下地に紋ではなく丸だけがかたどられています。これも理由が分からず、とても不思議です。

30. 耐震補強のため？築城中に壁になった窓

「幻の窓」CG 画像（（公財）文化財建造物保存技術協会提供）

平成の修理中の姫路城大天守で、もう1つ大きな発見がありました。最上層部の四隅の壁から窓枠（窓の引き戸をすべらせるための鴨居と敷居）が8カ所見つかったのです。

なぜ窓から壁に変わったのか、理由は分かっていませんが、大きく2つの見方があるようです。

1つは地震対策。最上層の構造補強のために、築城中に急きょ窓から壁に変更して施工したのではないかという見方です。姫路城築城開始5年前の慶長元年（1596）の慶長地震で伏見城の天守が損壊したのをはじめ、慶長年間には大地震が多発したため、重量の大きい大天守最上層に大きな窓を穿つと構造的に弱くなるので、補強をしたのではないかという考えです。

窓枠（（公財）文化財建造物保存技術協会提供）

2つ目は強風対策。慶長17年に台風で建築中の伊賀上野城の天守が倒壊するという一件があり、強風に対する補強ではないかという考えです。

いずれにせよ今もって謎が多い姫路城。次はどんな発見があるか楽しみです。

31. 修理中だから間近に見られた窓下のパイプ

姫路城大天守修理見学施設「天空の白鷺」のおかげで、身近に大天守が望めるからこそ見られるものがもう1つあります。すべての天守の窓の下から突(つ)き出ているというか、天守に突き刺(さ)さっているかのように見える長さ20センチほどの茶色い突起(とっき)物です。

答えを明かすと、実はこれ、雨水を外に排水(はいすい)するためのパイプなのです。木造建築の最大の敵が雨水なので、雨のときは窓を閉め、敷居(しきい)の溝(みぞ)（幅約7センチ、深さ約3センチ）に集まった雨水をパイプを通して外に排水しているのです。

かつては鉄製だったのが、昭和の大修理のときに銅製のパイプに変えられました。

身近に見られるからこそ、新たな発見があります。

32. 半世紀ぶりに新調された大天守の鯱瓦

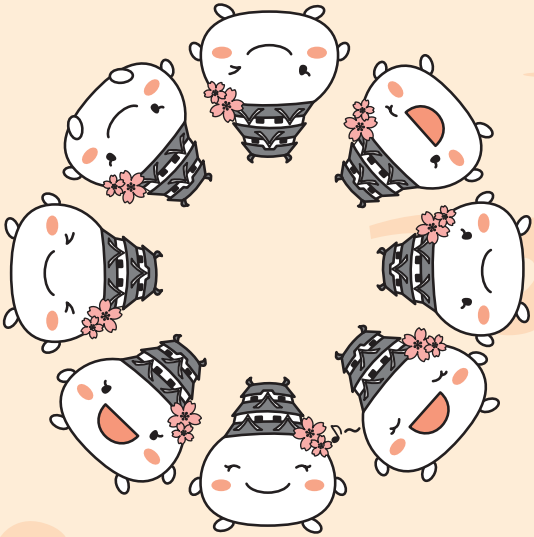
平成の修理に合わせて、大天守の鯱瓦が昭和の大修理から半世紀ぶりに新調されました。大天守の鯱瓦は全部で11尾。うち最上層の2尾にヒビが入っていたため新調することになり、貞享4年(1687)の鯱瓦の形状にならい、昭和の大修理の際に新調した鯱瓦と同じ寸法でつくられました。

日本伝統瓦技術保存会に依頼し、製作したのは「瓦発祥の地」奈良県にある山本瓦工業で、同社の山本清一会長は、大仏殿や唐招提寺など有名社寺の瓦葺きを手がけてきた第一人者。製作作業には姫路市からも鬼師（鬼瓦や飾り瓦をつくる職人）が参加し、山本瓦工業の皆さんと協力して高さ約1.9m、重さ約300キロの見事な鯱瓦をつくりあげました。

こうして完成した鯱瓦は平成24年4月に市民らの前で祝曳きされた後、5月末と6月初めに大天守最上層の屋根に無事据え付けられました。

なお、役目を終えた昭和の鯱瓦は、保存修理期間中に限り特別公開されている「リの一渡櫓」にて当分の間展示される予定です。

■トリビアン協力　姫路城外国語ガイド協会（VEGA）
姫路城シルバー観光ガイド
姫路グッドウィルガイドかしの木会
髙谷日出男さん
吉田正久さん
谷川恵一さん（総合文化誌「バンカル」副編集長）
加藤修治さん（（公財）文化財建造物保存技術協会）
堀田浩之さん（兵庫県立歴史博物館）
工藤茂博さん（姫路市立城郭研究室）
姫路城管理事務所
城周辺整備室（姫路城改修担当）



姫路市キャラクター
しろまるひめ

知るほどはまる　姫路城トリビアン　Part 1

平成 25 年 1 月発行
編集／姫路市観光交流推進室
発行／姫路市